

談話の不変化詞Ohの連鎖的位置と意味機能

Sequential Position and the Discourse Particle ‘Oh’

O'NEAL George

Abstract

This paper examined the interpretations of a single discourse particle ‘oh’ distributed as copies at various sequential positions throughout two conversations. First, two semi-spontaneous conversations were recorded and all instances of the discourse particle ‘oh’ were deleted and replaced with copies of a different ‘oh,’ which was recorded at a separate time. Accordingly, all instances of the discourse particle ‘oh’ in the conversations were segmentally and suprasegmentally identical. Next, research subjects were asked to assess all instances of the discourse particle ‘oh’ which appeared in the recording for meaning. Although each discourse particle ‘oh’ was segmentally and suprasegmentally identical, research subjects interpreted each one differently. However, there were patterns: discourse particles that appeared at certain sequential positions were interpreted in similar ways. Therefore, this paper concludes that the way in which the discourse particle ‘oh’ is interpreted is affected more by its sequential position and less by its segmental or suprasegmental characteristics.

Keywords : 会話分析、談話標識、Oh、連鎖、連鎖的位置

0 はじめに

筆者が分かっている限り、本研究の考察対象の単位を「談話標識・discourse markers」として初めて呼んだのはSchiffrin(1987)である。しかし、談話標識は様々で、談話において異なる機能を果たす場合がある。故に、談話標識と呼ばれる単位をさらに類別した方が適切である(Fischer 2006)。本稿の考察対象は談話標識の従属的範疇である「談話の不変化詞・discourse particles」である。具体的に言えば、本稿は談話の不変化詞と連鎖的位置の関係を考察する。本稿の目的は連鎖的位置と談話の不変化詞Ohが談話に果たす意味機能がいかに関わっているのかを解明することである。

談話の不変化詞は多数の機能があるということが指摘されてきた。例えば、談話の不変

化詞Ohは、談話にいくつかの機能を果たすことがあると論じる学者は少なくない (Heritage 1984, 1998; 西川 2002; Schiffrin 1987)。Ohが「話し手が何かを考えついた・思いついた」ことと「何かがあった今自分の頭に浮かんだ」ことを表明する機能がある (西川 2002)。しかも、Ohが「新情報を受け取る合図」として機能することもある (Heritage 1984: 300; 西川2002: 120)。さらにSchiffrinは、談話の不変化詞Ohの語用論的用法を特定している (Schiffrin 1987: 73-101)。したがって、談話の不変化詞Ohがいくつかの異なる機能を果たすことができると言える。

しかし、談話の不変化詞Ohが談話に果たす機能は、会話の当事者にいかに識別されるのだろうか。多くの学者は談話の不変化詞と談話標識が談話に果たす機能をイントネーションによって区別している (Bolinger 1989; Li-chiung 2006; 西川2002)。しかし、果たしてそうであろうか。聞き手は談話の不変化詞Ohが果たす機能を識別する際、イントネーションだけを基準に区別しているとは言えないと思われる。

談話の不変化詞の「連鎖的位置・sequential position」は、談話の不変化詞Ohが果たす機能を識別するのに役立つと思われる。多くの機能を果たすことができる談話の不変化詞Ohを識別するには、連鎖的位置の理解が分節音素的・超分節音素的の理解よりも重要であるということが本稿の主張である。本稿では、分節音素的にも、超分節音素的にも完全に同じ談話の不変化詞Ohの連鎖的位置が聞き手の談話の不変化詞Ohに対する解釈をいかに影響しているのかを解明する。

1 先行研究

本稿は、二つの概念を基盤としている。つまり、「談話の不変化詞」と「連鎖的位置」である。本稿の主張は、談話の不変化詞という概念と連鎖的位置という二つの概念の相互作用の分析に基づいているので、考察を進めるために、まず「談話の不変化詞」とは何か、「連鎖的位置」とは何かを説明する必要がある。次に、本稿の主張が、先行研究における談話の不変化詞の機能を区別する方法 (イントネーションによる談話の不変化詞の機能の区別) を批判的に検証した上で、談話の不変化詞の機能を区別する新たな方法を提案する。それぞれを以下の節で具体的に検証する。

1.1 談話の不変化詞

本節では、考察対象である談話の不変化詞Ohの特徴を明らかにする。なお、談話の不変化詞という範疇はいかに特徴付けられるのか、そして談話にいかなる機能を果たすのか、Ohを記述するためにより広く使用されている「談話標識」という概念と比較しながら説明する。

談話標識とは何か、談話にどのような役割を果たすのかはまだ安定した結論は得られて

おらず、いまでも学界で議論されている。従来の見解によれば、談話標識は談話の首尾一貫性に貢献する程度によって、すべての談話標識は区別できるとされている (Schiffrin 1987; Fraser 1990, 1996; Redeker 1991)。この見解によれば、品詞の一種として認められていないものの、談話標識は同質的な言語的単位であり、唯一異なるところは談話を結びつける機能だけである。

しかし、最近に、多くの学者は従来の見解を疑問するようになり、どの談話標識でも同質ではなく、談話標識という範疇をいくつかの従属的範疇に識別することは可能だという立場にたどり着いたと言える (Fischer 2006; Hansen 1998)。だが、談話標識をいくつかの従属的範疇に識別できるとは言えても、談話標識をいくつかの従属的範疇に分類できるかは本稿の範囲外の課題であり、取り扱わないことにするが、談話標識の従属的範疇の一つである談話の不変化詞の説明を以下に続ける。

Fischer (2006) は、本稿が取り扱う言語的単位を「談話の不変化詞」として分類し、談話標識の従属的範疇の一つとして位置付ける。しかし、「談話の不変化詞」と「談話標識」の区別は絶対的ではなく、談話標識と談話の不変化詞はいかに異なるかはまだ定まっていない課題である (Fischer 2006; Hansen 1998)。さらに、言語学者が同一専門用語を使用しても、異なるニュアンスがあるのが実情である。例えば、Fraser (2006b) がいう「談話標識」は、Hansen (1998) と Fischer (2006) の「談話の不変化詞」に相当する場合があります、専門用語の混乱は存続している。

さて、専門用語の混乱を避けるために、これから談話の不変化詞の定義を定めておく。まず、第一、関連性理論に従えば、談話の不変化詞は、属している発話をいかに解釈すればよいかの話し手から聞き手への指示として機能している (Blakemore 2002)。しかも、談話の不変化詞は属している発話の命題的内容に貢献しないので、概念的意味・conceptual meaning を欠如していると言えるが、談話の不変化詞は手続き的意味・procedural meaning を通じて、談話に貢献する (Hansen 1998; Blakemore 2002)。とはいえ、概念的意味と手続き的意味の区別は Blakemore (2002) と Hansen (1998) が考えているほど明確ではない。Blakemore (2002) によると、概念的意味と手続き的意味は排他的で、ある語彙には両方の意味が存在することは不可能である。結局、語彙は必ずどちらかに属しなければならないというのは Blakemore の理論の一部である。だが、Fraser (2006a) と Borderia (2008) が証明したように、手続き的意味しかないと考えられた語彙は概念的意味も備えている場合があり、逆の現象もある。したがって、Blakemore が分けている概念的意味と手続き的意味の区別は相対的にすぎないと言える。だが、それにも関わらず、概念的意味と手続き的意味の区別はまだ役に立つと思われ、本稿の談話の不変化詞の定義の一部として採用する。つまり、談話の不変化詞は主に手続き的意味を伝達する単位である。

第二、談話の不変化詞は一義的・monosemous である (Fraser 2006b; Schiffrin 1987;

Redeker 2006)。一義的とは、談話の不変化詞が一つの中核的意味を持つが、談話の文脈が談話の不変化詞の意味に影響し、談話の不変化詞が談話に最終的に果たす意味は談話の文脈と不変化詞の中核的意味の結合である。故に、談話の不変化詞は、異なる文脈に囲まれていれば、中核的意味に似ている別の意味を持つという立場である。談話の不変化詞Ohの中核的意味は長く議論されてきたが、Heritageが提起したOhの中核的意味が現在でも定説で、「Ohは、Ohの生産者が現在の知識・指向・情報・自覚の状態の変化を経験したこと示唆する」のである(Heritage 1984: 299)。しかし、上で述べたように、一義的な意味を持つ談話の不変化詞Ohは文脈による影響を受けるので、異なる文脈にあれば、談話の不変化詞Ohは違う意味を持つこととなる。したがって、談話の不変化詞Ohは中核的な意味を持つものの、文脈によって、中核的な意味に似ている別の意味もある。

第三、談話の不変化詞は「連鎖的位置に感応的・sensitive to sequential position」である。というのは、談話の不変化詞が談話に果たす意味は談話の不変化詞が置かれている連鎖的位置に左右されやすいことである。一つの中核的な意味しかない談話の不変化詞と絡み合う談話の文脈の要素とは、まさに「連鎖的位置」である。言い換えれば、一つの中核的意味しかない談話の不変化詞は置かれた連鎖的位置によって違ったニュアンスがある。

第四、談話の不変化詞は統語論的に言えば、非統率的な単位であり、属している文節の形態統語論の一部とならない。しかし、非統率的要素とは言え、談話の不変化詞は属している発話のどこでも現れ得るわけではない。文末に現れる談話標識と違い、談話の不変化詞は文末に現れられないのである。談話の不変化詞は文頭、または文中にしか現れない制限がある(Schiffrin 1987)。

第五、談話の不変化詞は以前の意味論的意味が残っていない(Fischer 2006)。以前の意味論的意味がまだある程度残っている談話標識を、そのまま談話標識と呼ぶこととし、以前の意味論的意味のない談話標識を違う範疇に入れ、「談話の不変化詞」と呼ぶこととする。したがって、You knowやI meanなどのような談話標識は用法に影響する以前の意味論的意味がある程度残っているため、そのまま談話標識として分類する。一方、OhやWellやNowやOkayやSoなどは以前の意味論的な意味が残っておらず、談話の不変化詞として類別できる。注意する必要があるのは、Well、Now、Okay、Soは字義的な意味がある場合もある。

以上、談話の不変化詞の定義を五点にまとめておいた。しかし、いかなる談話標識は談話の不変化詞に当たるか、当たらないかをまだ説明しておらず、これからその区別を努めることとする。本稿の定義に従えば、franklyやsuddenlyなどのような「文副詞・sentential adverb」は意味論的意味が明らかに残っているので、談話標識として分類してもよいのである。You knowやI meanなどのような「語彙化された句・lexicalized phrase」は、もともとの意味論的意味がある程度残るために、談話の不変化詞の範疇に入らず、談

話標識として分類される。And、but、or、のような接続詞は連鎖的位置に影響されていない単位であるため、連鎖的位置に感応的談話の不変化詞の範疇に入らず、談話標識の範疇に入る。しかも、談話の不変化詞は属している発話の命題的内容に貢献しないので、nowとthenのような副詞は談話の不変化詞という範疇に入らない。

1.2 連鎖的位置

本節では、「連鎖・sequence」と「連鎖的位置・sequential position」とは何かを説明することを試みる。本研究は、連鎖的位置が談話の不変化詞Ohの意味に影響を与えているという仮説に基づいているので、連鎖的位置を詳しく説明する必要がある。本節は、連鎖という概念を明らかにしながら、連鎖的位置の詳細について説明する。

談話の典型的な様式には会話があり、会話はいくつかの連鎖で構造されている。会話活動の特徴の一つは、会話の当事者が次々と発話の順番を交代することである。例えば、会話の当事者Aが質問をすれば、当事者Bが質問に答える。当事者Aが挨拶をすれば、当事者Bが挨拶を返す。会話の当事者は、単独で発話を生産するとは言えても、会話そのものは単独の行為ではなく、異なる当事者による複数の結びついた発話で構成されている。つまり、会話は会話の当事者の発話の「連鎖」である(メイナード 1992)。

連鎖とは異なる当事者による結びついた発話の単位である。言い換えれば、会話における発話は別の発話を要求し、要求をされた発話とペアを組む。例えば、「質問」という発話は「返答」という発話を要求するので、「質問」は「返答」と結びついている。したがって、「質問」と「返答」は「質問-返答」の連鎖となり、「質問-返答」の「隣接ペア・adjacency pair」として会話に出現する。「隣接ペア」とは、最初の発話と最初の発話が要求する発話の結びついた単位である (Schegloff 2007: 13)。もちろん、「隣接ペア」の種類は豊富で、「呼びかけ-応答」、「挨拶-挨拶」など他にもたくさんの隣接ペアがある。

隣接ペアの構成単位は「成分・pair part」である (Schegloff 2007: 13)。簡単に言えば、成分は発話行為という概念に近い。しかし、発話行為と異なり、成分は別の成分の存在に依存しており、単独では成り立たないのである。隣接ペアは少なくとも二つの成分で構成されているので、連鎖の最初の発話は「第一成分」と呼ばれ、連鎖の最初の発話に要求されている発話は「第二成分」と呼ばれている(前田他 2007: 132-135)。以下の隣接ペアの例は、筆者が録音した実際の英語の会話例であり、隣接ペアの「第一成分」と「第二成分」の構造を示す。各例の表記は会話分析のトランスクリプト作成法に基づき、英語で書いてある (7.1参照)。和訳は下に追加してある。

(1) 情報伝達－情報受諾の隣接ペア

15 George: Oka::y. So here's yer homework back. (第一成分)

さあ、それじゃ、宿題を返しますよ。

16 Jang: Oh thankyu. (第二成分)

あっ、ありがとうございます。

(2) 質問－返答の隣接ペア

9 George: enka::y: so uh:: how was study abroad? (第一成分)

それでところで、えっと、留学はどうだったの？

10 Sayuri: That was AWESome. (第二成分)

それはもうすごかったよ。

(2)の会話例は基本的な質問－返答隣接ペアを表している。もちろん、質問の直後に返答が出るとは限らないだけではなく、返答が全く出ない場合も十分にありうるという当然の批判があるだろう。つまり、会話は必ずしもうまく結びついている連鎖で構成されているとは限らないという指摘があるかもしれない。しかしながら、質問をされた会話の当事者が黙っていれば、その人は「話していない」と他の当事者に見なされ、その沈黙は「話すべきなのに話さない」こととして理解される。なぜなら、第一成分が要求している第二成分が現れないからである。言い換えれば、二つの成分で構成されている「隣接ペア」は必ずしも隣接していないという指摘はその通りであろう。しかし、隣接ペアの第一成分と第二成分は隣接しているはずだという規範的な関係がある。その結果、隣接しているはずの二つの成分が隣接していなければ、または要求をされた第二成分が欠如していれば、会話の当事者にとっても、会話の形にとっても、何らかの影響がある。

したがって、隣接ペアは会話に及ぼす影響があると言える。Schegloffをはじめとする多くの会話分析者が明らかにしてきたように、連鎖は談話の意味を著しく左右する(Schegloff 2007; Liddicoat 2007)。会話における発話がどのような意味を表すのかは、発話の「連鎖的位置」から独立しては考えられない。つまり、超分節音素的にも分節音素的にも完全に同一の発話であっても、異なる成分に属していれば、違う意味を持つというわけである。

「連鎖的位置」とは、連鎖のどこに談話の不変変化詞が位置しているかということを目指す。いかなる連鎖にも三つの位置があると考えられる。つまり、「成分前・pair part-initial」、「成分中・pair part-medial」、「成分末・pair part-final」である。より詳しく言えば、成分の前に現われる談話の不変変化詞は「成分前」という位置を占めている。例えば、「Oh, you need your homework back」の談話の不変変化詞Ohは成分前の位置を占めている。談話の不変変化詞は成分前に現われる傾向が強いものの、談話の不変変化詞は他の位置にも現われることがある(James 1973)。なお、成分が行う発話行為は既に開始したが、終了する前に現われる談話の不変変化詞は成分中という位置を占めていると言える。例えば、“You need

your oh homework”のOh成分中の位置に現われている。最後に、成分が行う発話行為が終わった後に現われる談話の不変化詞は成分末という位置を占めているが、多くの学者が指摘しているように、成分末の位置に出現できる談話の不変化詞はなく、成分末に現われ得る談話標識が少ない(西川 2002:116)。

しかし、さらに詳細な分類が可能である。談話の不変化詞は隣接ペアの第一成分の成分前の位置を占めていれば、「第一成分前・first pair part-initial」という位置に現われている。同じく、談話の不変化詞は隣接ペアの第二成分の成分前の位置を占めていれば、「第二成分前・second pair part-initial」という位置に現われていると言える。さらに、完成された隣接ペアの後に、次の隣接ペアの第一成分の前に生じる「連鎖終了成分・sequence closing thirds」と呼ばれる特殊な成分もある(Liddicoat 2007: 151-155)。連鎖終了成分として現れる談話の不変化詞は「連鎖終了成分」という連鎖的位置を占める。最後に、談話の不変化詞は単独で成分をなすことがあるので、談話の不変化詞が単独で成分をなす場合、なす成分はそのまま連鎖的位置にもなる(Schegloff 1996)。したがって、談話の不変化詞は現れ得る連鎖的位置が8つある。すなわち、第一成分前、第一成分中、第一成分末、第二成分前、第二成分中、第二成分末、第二成分末、連鎖終了成分、単独という8つの連鎖的位置である。

筆者の仮説は談話の不変化詞が談話に果たす意味を連鎖的位置で区別できることであるが、これは談話の不変化詞の意味を識別する唯一の方法ではない。従来の研究では、談話の不変化詞を伴うイントネーションの特性に基づいた識別方法がなされてきた。しかしながら、談話の不変化詞の意味をイントネーションの特性によって区別できるという説明は十分であるとは言えない。次節では従来の研究を批判的に検証する。

1.3 イントネーションによる談話の不変化詞の機能の区別

本節は談話の不変化詞が談話における機能を識別する現在でも有力な方法を紹介する。談話の不変化詞は多くの談話の機能が備わっているが、特定の発話における談話の不変化詞がいかなる機能を果たしているのかは識別しにくい。会話の当事者はいかなる方法で特定の談話の不変化詞が会話にいかなる機能を果たしているかを解明する有力な仮説をこれから紹介する。

談話の不変化詞Ohが表す意味はイントネーションによって定められていると考える学者がいる(Ajimer 1987; Bolinger 1989; Li-chiung 2006; 西川 2002)。この論点に従えば、談話の不変化詞Ohがいかなる意味をしているのかを理解するには、談話の不変化詞Ohを伴う韻律的特徴を特定する必要がある。談話の不変化詞Ohは異なる超分節音素的情報があれば、談話の不変化詞Ohが談話に果たす役割と意味が変わるという立場である。

Ajimer(1987)は、筆者が分かっている限り、談話におけるOhとともに現われる超文節

音素を始めて徹底的に研究した学者である。Ajimerによると、Ohとともに現われるイントネーションは主に二つある。一つ目は「宣言するトーン・proclaiming tone」と呼ばれており、下降するイントネーションが主な特徴であるが、二つ目は「言及するトーン・referring tone」と呼ばれており、上昇するイントネーションが主な特徴である。Ajimerは、Ohが談話における機能をトーンの違いに基づき、機能的に異なるいくつかのOhを区別できると主張している。つまり、Ohがいくつかの機能を備わっているが、識別するには、Ohを伴う超文節音素的情報を特定する必要がある。

Bolinger(1989)はOhが談話に果たす機能を数多く特定している。なお、Bolingerは多様な談話的機能が備わっているOhをイントネーション的特徴に基づいて区別する。すなわち、談話におけるOhがどの機能を果たしているかを解明する最良の方法はOhを伴うイントネーション的特徴を特定することである。例えば、「話し手が何かを思い出した・何かを考えついたことを示唆するOh」の出現は、比較的に高いピッチを伴うと指摘している(Bolinger 1989: 267)。「新情報として先の発言を受け止める合図としてのOh」は後続する発話のイントネーションより低く、後続する発話を目立たせる働きがある(Bolinger 1989: 275)。Bolingerはこの二つの機能に加えて、他の重要な機能のイントネーション的特徴を明らかにしている。つまり、談話の不変化詞Ohの超分節音素的特徴は談話の不変化詞Ohの分節音素的特徴よりも重要な意味があり、それを基準にしてOhの談話的機能を識別できるとBolingerは論じているので、Ajimerに近い立場を取っていると言える。

しかし、Ohが談話に果たす機能を韻律的特徴に基づいて区別できると考えている言語学者はBolingerとAjimerだけではない。例えば、Li-chiung(2006)は同じ視座に立っている。Li-chiung(2006)は中国語の談話標識を中心に研究を行っているが、英語の談話標識にも言及し、複数の機能を果たすことができる談話標識Ohが現在果たしている機能を識別する基準を述べている。具体的には、「Ohの意味論的意味が限定的だが、Ohの談話的意味は文脈及びOhの韻律に由来している」とLi-chiungは主張する(Li-chiung 2006: 268)。つまり、Bolingerが考えているように、Li-chiungはOhの韻律的特徴はOhが談話に果たす意味に重要な影響を及ぼすと分析している。しかし、Bolingerとは違い、Li-chiungはOhを囲む文脈もOhの意味に影響に及ぼしていることを認めているので、BolingerとLi-chiungの立場は完全に一致しているとは言えない。

しかも、英語の談話標識と談話の不変化詞の研究に携わっている日本人の中には、Bolingerの主張を支持する研究者もいる。例えば、西川(2002)は、Ohが英語の談話に果たす意味をいくつか特定している。しかし、西川は、Ohが談話に果たす機能を、韻律的特徴を基準にしてすべて区別できるとは主張していない。したがって、BolingerとLi-chiungの立場と一線を画す必要があるが、西川もOhの韻律的特徴によって、Ohが談話に果たす機能が変わってくる場合があると認めている。例として、西川は「話し手の思考を

表すOh」は平坦なイントネーションを伴い、長く伸ばして発せられると説明している(西川 2002: 122)。したがって、BolingerとLi-chiungの主張ほど包括的ではないにせよ、西川もOhのいくつかの談話的機能を、韻律的差異を基準にして識別できると結論づけている。

2 実験方法

2.1 被験者

被験者を集めるために、Facebookというネットワークサイトを通じ、英語のネイティブスピーカーに参加を呼びかけた。参加者は筆者の20代から60代の家族、友達、知人または同僚であり、アメリカ人(15人)が最も多かったが、イギリス人(3人)も、カナダ人(1人)も、オーストラリア人(1人)もいた。被験者の総人数は20人である。データは2009年12月中旬から2010年1月中旬までの間に収集されたものである。被験者の協力は無償であった。

2.2 材料

本研究に使用された材料は、筆者がiMovieという動画作成ソフトで作成した動画とYoutube上で設定したドメインだけであった。しかし、作成した動画は非常に複雑な材料であるため、いかに作成されたのかを説明する必要がある。それに、Youtube上のドメインをいかに取得したのかを説明する必要もある。したがって、本節では、本研究用の動画の作成方法とYoutube上のドメイン取得について説明する。

まず、筆者は新潟大学の学生二人に出演を依頼し、動画に出演する許可と動画をYoutubeに投稿する許可も学生から得た。次に、筆者は二人の学生に動画用の台詞を作るのを指示した。台詞作成の指示は、「夏休みにアメリカに留学して、日本に帰ってきたばかりで、筆者のオフィスに宿題を取りに来るという場面の設定で、留学の体験について筆者と話して下さい」ということであった。最後に、学生一人ずつに筆者と会話を交わしてもらい、会話を同時に二台のビデオカメラで録画した。筆者は、学生の留学の体験を聞いている間、なるべく自然に反応しようと努めた。最初の学生との会話に談話の不変化詞Ohが3回現れ、二番目の学生との会話にも3回現れたので、談話の不変化詞Ohは合計6回現れた。

会話の録画が終わった後、筆者は録画されたビデオをiMovieという動画作成ソフトに入れ、本研究用の動画の作成に取りかかった。まず、二つの会話に現れたすべての談話の不変化詞Ohを予め入れ替え用として用意しておいた別の談話の不変化詞Ohと入れ替え、動画に現れるすべての談話の不変化詞Ohを完全に分節音素的にも超分節音素的にも同一にした。言い換えれば、本研究用の動画に現れる談話の不変化詞Ohは音韻論的差異が全くない。

合わせて、三つの動画が作成をされた。動画1は、入れ替え用の談話の不変化詞Ohだけである。したがって、動画1には談話の不変化詞Ohが1回言われる、文脈のない動画である。動画1に現れる談話の不変化詞OhをOh#1と呼ぶ。動画2は最初の学生との会話の動画で、談話の不変化詞Ohは合わせて3回現れた。動画2に現れる談話の不変化詞OhをOh#2、Oh#3、Oh#4と呼ぶ。動画3は二番目の学生との会話の動画で、動画3にも談話の不変化詞Ohは合わせて3回現れた。動画3に現れる談話の不変化詞OhをOh#5、Oh#6、Oh#7と呼ぶ。三つの動画が次々再生されるように設定した上で、被験者への指示(3.3)を動画の冒頭に挿入した。

最後に、動画が完成された後、動画はyoutubeに投稿をされた。筆者は事前にwww.youtube.com/user/sarcasmcheckというyoutubeのサイトを確保した。なお、誰でも動画をアクセスすることができるように、筆者はサイトを一般公開した。

2.3 手順

まず、被験者に、www.youtube.com/user/sarcasmcheckにアクセスするように依頼した。次に、動画をスタートさせ、被験者が、動画に出る七つの談話の不変化詞Ohを筆者が設定した基準によって、評価するように指示した。被験者は、動画に現れた談話の不変化詞Ohが、「何か考えついた・何か思い出した」ことの意味を表すと思えば、1を、「先の発話を新情報として受け止める」ことの意味を表すと思えば、2を、談話の不変化詞Ohの意味は不明であれば、3を、独特の解釈があれば、4を、動画に現れる談話の不変化詞Ohは無意味だと思えば、5を回答としてメールに書いて送信するように指示した。加えて、もし被験者が、4を選択したとすれば、自分の独特の解釈も書くのを求められた。

3 実験の結果

2.3で明記した基準に基づき、会話に現れた談話の不変化詞Ohの意味を被験者に評価してもらった。筆者は20人の被験者から送られた評価を集計し、以下に別々に記載した。さらに、談話の不変化詞Ohが現れた談話的環境は以下のトランスクリプトで現される。トランスクリプトは会話分析の作成法に基づいて、英語で書いてある(6.1参照)。トランスクリプトに現れる発話の連鎖的位置は発話のすぐ側にある括弧の中に書いてある。

動画に現れた最初の談話の不変化詞Ohは言語的文脈が全くなかった。というのは、Oh#1の前後には何もなく、単独で現れた。したがって、他の成分の存在を当然視し、依存している連鎖的位置という概念はOh#1に当てはまらない。故に、最初のOh#1は連鎖的位置がないと言える。

しかし、そうとは言え、被験者は単独で現れた、文脈が欠如しているOh#1を評価することは不可能になったわけではない。被験者の半分に当たる10人はOh#1を「新情報を受

け止めるOh」として解釈した。6人は「何か考えついた・思い出したことを意味するOh」として解釈した。たった1人はOh#1が意味不明だと思った。2人はOh#1に対して、独特の解釈を下した。最後に、1人はOh#1は無意味だと考えた。したがって、文脈がない場合、談話の不変化詞Ohに対する解釈は様々だが、「新情報として受け止めるOh」の解釈が最も多い。

Oh#1と違い、Oh#2は言語的文脈に囲まれた。Oh#2は最初の学生との会話に現れた、最初の談話の不変化詞Ohである。Oh#2が現れた環境と連鎖的位置は以下の通りである。Oh#2は斜体で書いてある。

- 1 Jang: H[ey:.] (主連鎖第一成分：呼びかけ) long time no see:
(主連鎖第一成分：挨拶)
- 2 George: [Hi] (主連鎖第二成分：応答)
- 3 (.)
- 4 George: Long time no see. (主連鎖第二成分：挨拶)
- 5 (2.5)
- 6 George: *O::h.* (1.0) You nee dyer homework. Okay.
(主連鎖第一成分：情報伝達)
Please take uh seat. (主連鎖第一成分：動作の要求)
- 7 (.)
- 8 Jang: Yeah. (第二成分：情報受諾)

Oh#2は、完成された「挨拶-挨拶」の隣接ペアと「呼びかけ-応答」の隣接ペアと2.5秒の沈黙の後に生じる。したがって、新しい隣接ペアの第一成分が始まったと言える。なお、Oh#2は新しく生じる隣接ペアの第一成分の冒頭に現れるので、Oh#2の連鎖的位置は「第一成分前」である。被験者の95%に当たる19人は「第一成分前」に現れたOh#2は「何かを考えついた・思い出した」ことを意味するOhとして解釈した。1人だけはOh#2に対して、独特の解釈を下した。

Oh#3はOh#2と異なる連鎖的位置を占めている。Oh#3は最初の学生との会話に現れた、二番目の談話の不変化詞Ohである。Oh#3の連鎖的位置は以下の通りである。Oh#3は斜体で書いてある。

- 21 Jang: But uh (.) I won't forget o::ne, (先行連鎖第一成分：情報伝達)
- 22 George: Oh. (.) Wha[t. (1.0) Uh huh] (先行連鎖第二成分：情報受諾)
- 23 Jang: [hhnhhhhhnh So.] I fall::, fell in love in
aMER[ica::], (1.5) but (2.0) um:: ma. he's my best frie:nd.
(主連鎖第一成分：情報伝達)
- 24 George: [uh huh]

25 George: *O:::h*. Oka[y]. (主連鎖第二成分：情報受諾)

Oh#3は先の発話に反応する発話である「Okay」の前に現れるので、「Okay」は「情報伝達－情報受諾」の隣接ペアの第二成分をなしている。さらに、Oh#3は「Okay」の前に現れているので、Oh#3は「第二成分前」という連鎖的位置に位置していると言える。被験者の55%に当たる11人は「第二成分前」に現れるOh#3を「新情報を受け止めるOh」として解釈した。2人はOh#3が意味不明だと考えた。7人は独特の解釈を下した。

Oh#4の連鎖的位置とOh#3の連鎖的位置は似ている。Oh#4は最初の学生との会話に現れた最後の談話の不変化詞Ohである。Oh#4の連鎖的位置は以下の通りである。Oh#4は斜体で書いてある

34 Jang: well (2.0) in cafe::, (,) h-he said to me: seriously::=

35 George: =uh huh.

36 Jang: I'm gay, (主連鎖第一成分：情報伝達)

37 George: *O:::h*. Okay oka[y.] (主連鎖第二成分：情報受諾)

Oh#4は先の発話に反応する発話の冒頭に現れている。したがって、Oh#4を先行している発話は第一成分となり、第一成分に反応する、Oh#4が先行している発話は第二成分となる。故に、Oh#4は「第二成分前」に位置している。被験者の65%にあたる13人はOh#4を「新情報を受け止めるOh」として解釈した。7人はOh#4に対して、独特の解釈を下した。さらに、独特の解釈をした被験者が書いたことを言い換えれば、「先の発話を新情報として処理することを現すOh」だと主張する被験者は少なくないのである。

Oh#5はOh#2と同じ連鎖的位置を占めている。Oh#5は二番目の学生との会話に初めて登場した談話の不変化詞Ohである。Oh#5の連鎖的位置は以下の通りである。Oh#5は斜体で書いてある。

1 Sayuri: Hello mister O'[Neal]. (主連鎖第一成分：挨拶)

2 George: [Hi.] (主連鎖第二成分：挨拶)

3 (4.0)

4 George: *O:::h* (1.0) You need your homework (主連鎖第一成分：情報伝達)

5 (5)

6 Sayuri: [Yes (主連鎖第二成分：情報受諾)]

Oh#5は、前の隣接ペアと4.0の沈黙の後に生じた。前の隣接ペアは完成されているので、後の発話は新しい隣接ペアの第一成分をなしていると言える。しかも、Oh#5は新しく生じた隣接ペアの第一成分の前に現れたので、Oh#5は「第一成分前」という連鎖的位置を占めている。被験者の95%に当たる19人はOh#5を「何か考えついた・思いついた」ことを意味するOhとして解釈した。1人だけは独特の解釈を下した。

Oh#6は二番目の学生との会話に現れた二番目の談話の不変化詞Ohである。Oh#6の連

鎖的位置は以下の通りである。Oh#6は斜体で書いてある。

12 Sayuri: But hey O'Neal, (.) Mister O'Neal, hnhhnhow old do I look like?

(主連鎖第一成分：質問)

13 George: (.) uh (1.0) eighteen, (.) nineteen, (主連鎖第二成分：返答)

14 Sayuri: Yeah. Actually I'm already twenty-o:ne,

(主連鎖第一成分：情報伝達)

15 George: O::h. (主連鎖第二成分：情報受諾)

Oh#6は先の発話に対する反応である。しかし、Oh#6は他の発話を先行していない。したがって、Oh#6そのものは「情報伝達?情報伝達」の隣接ペアの第二成分だと言える。Oh#6は他の発話の前に現れていると言えないので、「第二成分前」という連鎖的位置を占めているとは言いがたい。Oh#6は「第二成分」そのものであるため、連鎖的位置は「第二成分」である。被験者の80%に当たる16人はOh#6を「新情報を受け止めるOh」として解釈した。1人はOh#6が意味不明だと考えた。1人は独特の解釈を下した。2人はOh#6が無意味だと考えた。

Oh#7とOh#6は似ている連鎖的位置を占めている。Oh#7は二番目の学生との会話に現れた最後の談話の不変化詞Ohである。Oh#7の連鎖的位置は以下の通りである。Oh#7は斜体で書いてある。

23 Sayuri: an (.) then I showed him the ID card, (.) and he thought oh?

I'm sorry:: (1.0) he was like I'm sorry::, I thought you were sixteen.

(主連鎖第一成分：情報伝達)

24 George: O::h. (.) (主連鎖第二成分：情報受諾)

Oh#7は先の発話に対する反応なので、先の発話に対するペアをなしていると言える。従って、Oh#7を先行している発話は第一成分となり、Oh#7は第二成分となる。しかし、Oh#7は他の発話を先行しておらず、「第二成分前」に現れているとは言えない。Oh#7は単独で「情報伝達-情報受諾」の第二成分をなしているため、Oh#7は第二成分そのものである。被験者の50%に当たる10人はOh#7に対して、独特の解釈を下した。4人はOh#7を「新情報を受け止めるOh」として解釈したが、2人は意味不明だと考えた。最後に、4人はOh#7が無意味だと考えた。

4 結論

この実験では、筆者は分節音素的にも、超分節音素的にも完全に同一の談話の不変化詞Ohのコピーを会話のいくつかの位置に入れておいた上で、被験者に談話の不変化詞Ohの意味を評価してもらった。分節音素的にも、超分節音素的にも完全に同一の談話の不変化詞Ohは、談話のどこに出現しても、一定した意味をするのは当然だと思われるかもしれ

ないが、本研究の結果が示す通り、談話の不変化詞Ohの連鎖的位置が異なれば、違う意味をもつこととなると被験者に解釈される傾向がかなり強いようである。

しかし、完全に同じ談話の不変化詞Ohに対する異なる解釈は超分節音素的差異、または分節音素的差異に由来することは不可能である。逆に、連鎖的位置は談話の不変化詞Ohの解釈に大きく影響していると言える。即ち、完全に同じ談話の不変化詞Ohは談話のどこに現れるかによって、現す意味が異なる。普段、談話標識や語彙や文法などは談話が表す意味を形づけると思われるが、本研究の結果が示唆していることは、まさにその逆の現象もあるということである。つまり、談話の構造は談話の不変化詞の意味を形づけており、影響している。

本研究に現れたすべての談話の不変化詞Ohは超分節音素的にも、分節音素的にも同じだったので、そういう変数は解釈の差異の決め手となったのは不可能である。動画に現れたすべての談話の不変化詞Ohの唯一の差異は連鎖的位置であった。したがって、連鎖的位置の差異は解釈の決め手となったと言える。本研究の結果を見る限り、談話の不変化詞Ohは、第一成分前という位置に置かれるだけで、「何かを考えついた・思い出した」ことを意味すると結論づけられるのである。本研究において、第一成分前に現れた談話の不変化詞Ohは二つがあった。つまり、Oh#2とOh#5である。Oh#2とOh#5が第一成分前に現れたが、どちらも被験者の95%に当たる19人によって、「何かを考えついた・思いついた」ことを意味するOhとして解釈された。言い換えれば、第一成分前に現れる談話の不変化詞Ohは「何かを考えついた・思いついた」ことを意味すると解釈される傾向が非常に強いのである。

しかも、本研究の結果を見る限り、談話の不変化詞Ohは、第二成分前という位置に置かれるだけで、「新情報を受け止める」ことを意味すると結論づけられるのである。本研究において、第二成分前に現れた談話の不変化詞Ohは二つあった。つまり、Oh#3とOh#4である。被験者の55%に当たる11人はOh#3を「新情報を受け止めるOh」として解釈した。7人の被験者は、Oh#3に対して独特の解釈を下したが、この7人の被験者の解釈を言い換えれば、「新情報を受け止めるOh」に近い解釈が多いと言える（独特の解釈は7.3に記載されている）。しかも、Oh#4は被験者の65%に当たる13人によって「新情報を受け止めるOh」として解釈された。Oh#4に対して、独特の解釈を下した被験者は7人である。Oh#3への解釈と同じように、Oh#4に対する独特の解釈を言い換えれば、「話し手は先の発話を新情報として処理していることを表明している」ことに近い解釈が多いと言える（独特の解釈は6.3に記載されている）。したがって、談話の不変化詞Ohを「第二成分前」に置くことだけで、先の発話を「新情報として処理する」ことを表す意味として解釈される傾向がやや強いのである。

しかし、本研究の結果を見る限り、談話の不変化詞Ohは単独で第二成分をなしていれば、

一定の意味を現しているとは結論づけられない。動画には、単独で第二成分をなしている談話の不変化詞Ohが二つあった。つまり、Oh#6とOh#7である。Oh#6を解釈した際、被験者の80%に当たる16人はOh#6を「新情報を受け止めるOh」として解釈した。一方、被験者はOh#7を解釈した際、「新情報を受け止めるOh」として解釈したのはわずか4人である。全く同じ連鎖的位置を占めているにも関わらず、被験者の解釈がはっきり分かれている。したがって、談話の不変化詞Ohは単独で隣接ペアの第二成分をなしているとすれば、連鎖的位置が談話の不変化詞Ohに影響していると断言できない。原因は不明だが、単独で成分をなしていると関係があると思われる。

さて、見える通り、本研究は談話の不変化詞Ohが単独で「成分」をなしておらず、「成分前」という連鎖的位置を占めている限り、談話の不変化詞Ohが談話に果たす機能は連鎖的位置によって影響をされ、その結果、意味が変わることが徴証された。ここで、意味機能の変化の過程を説明する概念を提起したい。談話の不変化詞Ohは談話の構造のどこに属しているかによって、意味が変わる。故に、談話の不変化詞Ohの意味は連鎖的位置によって、ある程度、統率されていると言える。言い換えれば、談話の不変化詞Ohが談話に果たす意味は連鎖的位置によって、コントロールされている。したがって、「連鎖的統率・sequential governance」は談話の不変化詞Ohが談話に果たす意味の変化を説明する。「連鎖的統率」とは、連鎖そのものが、談話の不変化詞Ohの意味に影響しているということの意味する概念である。

もちろん、ここで提起している「統率」という概念は、生成文法が採用している「統率」という概念に相当しない。筆者が提起している「統率」は談話における統率であり、ある程度の「意味のコントロール」に相当していると言ってもよい。生成文法における「統率」と違い、「連鎖的統率」は文以上の存在を当然視しているだけではなく、文以上の単位がなければ、筆者が提起している「連鎖的統率」が存在することが不可能である。

しかし、第一成分前に現れるだけで、または第二成分前に現れるだけで、談話の不変化詞Ohは一定の意味しか表せないという主張が言い過ぎのであろう。第一成分前に現れる談話の不変化詞Ohは、または第二成分前に現れる談話の不変化詞Ohは、本稿が指定している意味と別の意味を現す場合があるだろう。だが、そうなる場合、「有標・marked」となると思われる。したがって、本稿が指定している、連鎖的位置に影響されている談話の不変化詞Ohの意味は「デフォルトの意味・default meaning」である。

会話の当事者は、いくつかの意味を果たすことができる談話の不変化詞Ohの意味を識別する際、談話の不変化詞Ohが現れる連鎖的位置は役割を果たす。会話の当事者は無意識的に談話が連鎖のどの成分に属しているのかを理解することができ、その理解は談話の不変化詞Ohへの解釈に重大な影響を与える。さらに、談話の不変化詞Ohが完全に同一の超分節音素的特徴、または分節音素的特徴があるとしても、談話の不変化詞Ohを解釈す

る人は連鎖的位置によって意味を区別する。したがって、談話の不変化詞が解釈される際、連鎖的位置は超分節音素的特徴、または分節音素的特徴よりも重要な役割を果たす。

とはいえ、Bolingerの論点がある程度認めなければならない。Bolinger (1989)と西川 (2002)が指摘したように、談話の不変化詞Ohが談話に果たす意味はイントネーションと関わっているのは確実である。しかし、本研究の結果が示したように、イントネーションの差異がなくても、被験者は談話の不変化詞Ohの異なる意味を識別することができる。したがって、Bolinger (1989)と西川 (2002)が言い張るように、イントネーションは談話の不変化詞Ohが談話に果たす意味と関わっていると認めてもよいものの、イントネーションが談話の不変化詞の意味の識別に貢献することは、二次的なものに過ぎないと言わざるを得ない。

5 終わりに

最後に、筆者のこれからの研究が目指すところを紹介したい。本研究の結果は、談話の不変化詞Ohが談話に果たす意味的機能は連鎖的位置に影響されていることを示唆している。これからの考察対象は、他の談話の不変化詞と連鎖的位置の関係にする。つまり、「連鎖的統率」で、他の談話の不変化詞の意味を説明できるかはこれからの研究の焦点となる。

6 付録

6.1 トランスクリプト作成法

トランスクリプト作成法にしようされる記号は、以下のサイトで見える：
<http://web.me.com/cerebralabstraction/discourseparticles/oh.html>

6.2 会話のトランスクリプト

会話のトランスクリプトは長いため、本稿に記載できないが、以下のサイトで見える：
<http://web.me.com/cerebralabstraction/discourseparticles/oh.html>

6.3 被験者の独特の解釈

被験者が書いた独特の解釈は長いため、本稿に記載できないが、以下のサイトで見える：
<http://web.me.com/cerebralabstraction/discourseparticles/oh.html>

6.4 Youtube上のサイト

本研究に使用された動画は、以下のYoutubeのサイトに投稿され、被験者にアクセスしてもらい、見てもらった：
www.youtube.com/user/sarcasmcheck#p/a/u/0/sI_G7WYpaWK

参考文献

- Ajimer, K. 1987. "'Oh' and 'Ah' in English conversation". In W. Meijs (ed.), *Corpus Linguistics and Beyond. Proceedings of the Seventh International Conference on English Language Research on Computerized Corpora*, 61-86. Amsterdam: Rodopi.
- Blakemore, D. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning*. Cambridge: CUP
- Bolinger, D. 1989. *Intonation and Its Uses: Melody and Grammar in Discourse*. Stanford: Stanford University Press.
- Borderia, S. P. 2008. "Do discourse markers exist? On the treatment of discourse markers in Relevance Theory". *Journal of Pragmatics*, 40, 1411-1434.
- Fischer, K. 2006. "Towards an understanding of the spectrum of approaches to discourse particles: introduction to the volume". In K. Fischer (ed.). *Approaches to Discourse Particles*. Amsterdam: Elsevier.
- Fraser, B. 2006a. "On the conceptual-procedural distinction". Find Articles. Retrieved September 19, 2009, from http://findarticles.com/p/articles/mi_m2342/is_1-2_40/ai_n17113874/
- Fraser, B. 2006b. "Towards a theory of discourse markers". In K. Fischer (ed.). *Approaches to Discourse Particles*. Amsterdam: Elsevier.
- Heritage, J. 1984. "A change-of-state token and aspects of its sequential placement". In J. M. Atkinson & J. Heritage (eds). *Structures of Social Action: Studies in Conversational Analysis*. Cambridge: CUP.
- Heritage, J. 1998. "Oh-prefaced responses to inquiry". *Language and Society*, 27, 291-334.
- Hansen, M. 1998. *The Function of Discourse Particles*. Amsterdam: John-Benjamins.
- James, D. 1973. "Another look at, say, some grammatical constraints, on, oh, interjections and hesitations". In C. Corum et al. (eds.), *Papers from the Ninth Regional Meeting*. Chicago: Chicago Linguistic Society, 242-251.
- Li-chiung, Y. 2006. "Integrating prosodic and contextual cues in the interpretation of discourse markers". In K. Fischer (ed.). *Approaches to Discourse Particles*. Amsterdam: Elsevier.
- Liddicoat, A. 2007. *An Introduction to Conversation Analysis*. Sydney: Continuum
- 前田泰樹・水川喜文・岡田光弘 2007. 『エスノメソドロジー』 東京: 新曜社.
- メイナード泉子 1992. 『会話分析』 東京: くろしお.
- 西川眞由美 2002. 「談話標識Oh」. 『英語語法文法研究』 9 東京: 開拓社, 110-125.
- Redeker, G. 2006. "Discourse markers as attentional cues at discourse transitions". In K. Fischer (ed.). *Approaches to Discourse Particles*. Amsterdam: Elsevier.
- Schegloff, E. A. 1996. "Turns in organization: one intersection of grammar and interaction". In E. Ochs, E. A. Schegloff, S. Thompson (eds.). *Interaction and Grammar*. Cambridge: CUP.
- Schegloff, E. A. 2007. *Sequence Organization in Interaction*. Cambridge: CUP.
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse Markers*. Cambridge: CUP.